

# 『新モンゴル』誌第2号と モンゴル人留学生による文芸活動

内 田 孝

1. はじめに
2. モンゴル人の日本留学と機関誌の刊行
3. 『新モンゴル』誌第1号
4. 『新モンゴル』誌第2号
5. 『新モンゴル』第2号に掲載された文学作品
6. おわりに

## 1. はじめに

1922年、初期日本留学者の一人テムゲト（漢語名：汪睿昌）は、天津にいた日本人から活字印刷に関する技術を習得しながら<sup>1)</sup>内モンゴル人として初めてモンゴル文字活字の製作に成功し、北京に蒙文書社を設立した。その後、1926年にはヘーシンゲーらが奉天（現在の瀋陽）に東蒙書局、1927年にブフヘシグが中心となり北京にモンゴル文学会（1933年に満洲国の開魯に移転）を設立し、モンゴル語の活字印刷を開始する。以来、モンゴル社会に活字文化が浸透していき、1932年から1945年の間の内モンゴルの東部地域および東北部地域を含んだ満洲国、内モンゴル西部地域を含んだ蒙疆政権<sup>2)</sup>においてモンゴル語の書籍、新聞・雑誌などの定期刊行物、文芸団体や学校の機関誌などの出版が次第に増えていった。満洲国内においては蒙古会館、青旗社<sup>3)</sup>、蒙文編訳館などが、蒙疆政権域内では、主席府出版社、蒙疆新聞社、蒙古文化研究所などの機関が出版活動を主に担っていた。活字文化が社会に定着しつつあったとはいえ、当時の特に新聞や雑誌などのメディアは、日本の植民地的支配の枠組の中で日本の植民地政策を強化する政治的・文化的支配の道具として機能しており、そこに掲載された記事は当時の日本による支配を正当化する思想が盛り込まれた。それゆえこうした刊行物は中国国内では文化大革命のような政治的混乱期に処分の対象とされ、今日ではごく一部しか残されていない。当時どのような定期刊行物が発行されていたのかという全体像の把握、発行母体や発行期間に関する情報、内モンゴルを主とした中国国内における現存状況については、内モンゴル自治区図書館に勤務

するトゥイメル氏が調査を行っている<sup>4)</sup>。さらに、フフバートル氏はそれら定期刊行物の現存状況を日本など中国国外にも広げて調査を行い、所蔵先と所蔵巻号の詳細をまとめた<sup>5)</sup>。その後にも、中国や日本における大学や研究機関の図書館などに所蔵されている満洲国・蒙疆政権時代のモンゴル語出版物の整理が進む中で、埋もれていた資料が新たに確認されるというケースが少しずつ続いている<sup>6)</sup>。

それらの資料を利用して大きな成果を挙げている分野が文学研究である。活字文化の勃興期であった当時、文筆業で生計を立てる職業作家はまだ生まれていなかった。出版物に掲載されている詩や小説の作者のほとんどはそれまでになかった近代的学校教育を享受した、在学中か卒業後間もない20才前後の青年たちであり、作品には彼らの若々しい感性や真摯な主張が込められていた。それらの作品は新中国の成立後につくられたモンゴル文学史からはほとんど抜け落ちていたが、1980年代後半からそうした作品に対しても文学的評価を与え、モンゴル文学史の中に改めて正当に位置づけようとする研究作業が始まった。この一環として、エルデムバートル<sup>7)</sup>、エルデムトゥグス<sup>8)</sup>、チョグジラン<sup>9)</sup>らの若者が作家として評価され、また有名無名の執筆者による投稿作品も収集紹介されるようになった<sup>10)</sup>。また、資料が希少で目にする機会が少なかった作家や文学者の著作を個人作品集として整理出版する作業もなされている。これまでに内モンゴル現代文学の創設者と評価されているサインチョグト（以下に述べるサイチンガーと同一人物）の1945年以前の著作を一冊にまとめた作品集<sup>11)</sup>やサインチョグト全集<sup>12)</sup>、リンチンホルロー作品集<sup>13)</sup>、ヘーシンゲー著作集<sup>14)</sup>、フールンガー著作集<sup>15)</sup>などが刊行された。さらに、当時、月刊文芸誌の刊行、出版活動、近代的な社会生活を送る上で欠かせない近代語彙の創出、文学振興のための懸賞小説募集といった重要な文芸活動を行っていたモンゴル文学会に関する研究や資料紹介も進められている<sup>16)</sup>。

本稿では、当時の出版物の中でも特に日本に留学していたモンゴル人青年らが編集発行していた刊行物に関して論じる。その中でも今回新たに現存が確認された在日モンゴル人の機関誌『*Sin-e Mongyul*（新モンゴル）』（括弧内は筆者による日本語訳、以下同様。以下、『新モンゴル』と記す）第2号の概要と特にそこに掲載された文芸作品を取り上げて考察を加えるものである。

## 2. モンゴル人の日本留学と機関誌の刊行

清朝末期、ジョスト盟ハラチン右旗（現在の内モンゴル自治区赤峰市ハラチン旗）で王侯グンサンノルブ親王が始めた社会改革は、内モンゴル地域の中でも最初となる近代化への胎動であった。清朝皇室とつながりの深かったグンサンノルブは日清戦争後に近代化の必要性を認識した清朝政府同様に、19世紀末から旗内における近代化の必要性を認識し、産業振興、軍事力整備、新聞発行や郵便事業など近代的な社会制度の確立に向け諸改革を実行する。こうした社会改革の根幹となる学校教育の整備にも力を注ぎ、1902年以降、男子

学校、女学校、軍事学校を開設した。ハラチン右旗でこうした新式教育を受けた若者の中から、上述のテムゲトのように内モンゴル社会全体の近代化に貢献した知識人や、民族意識に目覚め内モンゴル人民革命党などの政治活動に積極的に関与していく民族活動家が多数輩出された。

教育分野における内モンゴルと日本との間の交流にもゲンサンノルブが大きく関わっていた。1903年に大阪で開かれた第5回内国勸業博覧会を自ら視察し、モンゴルを近代化させる上で日本の経験から学ぶべき点があると考えたゲンサンノルブは、ハラチン右旗内に開校した上述の3つの学校に日本人教師を招き、日本語教育も行った。そうした日本語教師の一人で、女学校教師を務めていた河原操子の協力により、1906年初めには女学生3人が日本へ留学することになり、これがモンゴル人として最初の日本留学生となった。この年には、新疆トルゴド部族のバルタ王、さらにハラチン右旗から今度は男子学生5人が相次いで日本へ留学している。

その後はモンゴル人留学生の人数は数えるほどしかいなかったが、1925年以降、増加することになる。これは、笹目恒雄（笹目秀和）という青年が親類から集めた資金を用いてモンゴル人留学生の受け入れを行ったことによる。笹目は私費を投じてモンゴル人を日本へ留学させる事業を志した理由について明確な説明を残していないが、信仰心に基づいた使命感とモンゴル民族独立運動への深い共鳴によるものであったようだ<sup>17)</sup>。満州事変が勃発する1931年までに、笹目は計36人のモンゴル青少年を日本で育成した<sup>18)</sup>。この当時、日本で学んでいたモンゴル人留学生らは「蒙古留日学生会」を組織し、1929年には機関誌『祖国』を刊行した<sup>19)</sup>。『祖国』は現存は確認されていないが、第2号の目次および一部論説の日本語抄訳は残されている。それによると対外的にはモンゴル民族の独立、対内的には封建的社会制度の変革を主張する論説が多く掲載されていた。創刊号の発行部数は100部<sup>20)</sup>、誌面はモンゴル語文と漢文からなり、数号が発行されたが満州事変後には休刊状態にあった<sup>21)</sup>。

満洲国成立後、モンゴル人留学生の数は増加していく。それは満洲国において日本への留学生派遣を制度化して推進した結果であった。日本側にも、1934年に教育、医療、牧畜業の向上などモンゴル地域において文化面での工作活動を行なうため、財団法人「善隣協会」が設立された。協会が設立した専門学校内に「蒙古学生部」が設置され、留学生はそこで日本国内の大学や専門学校へ進学するための日本語などの予備教育を受けた。満洲国と蒙疆政権地域の出身者とは区別されることなく留学生宿舎の「善隣学寮」に居住した。彼らは善隣学寮に「蒙古留日同郷会」を設置して、その学術部は『*Mangq-a-yin Qongq-a* (漠声)』（以下、『漠声』と記す）という出版物を刊行した。そこには、内モンゴルの政治状況や外モンゴル情報の紹介、論説、文芸などが掲載された。この雑誌も計何号刊行されたかは明らかでなく、現存するのは1935年4月に発行された創刊号だけである。創刊号の印刷は牛込の「宗文社」と記されており、これも『祖国』同様にモンゴル語文、漢文の二

言語が用いられていた。油版のモンゴル語ページは計35ページ、鉛版の漢語ページはそれより多い49ページを占めている。寄稿者の数を比較しても、モンゴル語での寄稿者は巻頭言を含めわずか4人であるのに対し、漢語での寄稿者は12人とはるかに多い。

その後、「留日蒙古同郷会」（モンゴル語表記はNibpun-dur saγuju būkūi mongγulčud-un qural。以下、「同郷会」と記す）が、『漢声』に代わって『新モンゴル』という機関誌を作った。「同郷会」は『漢声』を刊行した「蒙古留日同郷会」と同一団体であろう。『新モンゴル』は創刊号（1941年刊行）、第3号（1943年12月刊行）、最終号となる第4号（1944年9月刊行）の現存が確認されていた。創刊号は奥付が含まれるはずの終わりの数ページ（65ページ以降）と裏表紙が欠落しているため刊行年月を完全に特定できないうたが、満洲国で発行されていたモンゴル語新聞『青旗（Köke Tuγ）』紙22号（1941年8月16日付）に『新モンゴル』創刊についての紹介記事が掲載されていることから1941年であることは確実で<sup>22)</sup>、年一回の刊行と推定されていた。第4号は戦局の悪化により日本国内で印刷紙が欠乏していたため、蒙疆政権下の主席府出版社で印刷された。第4号が蒙疆政権内で印刷されていること、雑誌の裏表紙もしくは奥付には創刊号以来一貫して「成紀<sup>23)</sup>」という年号が用いられていることから、『新モンゴル』は蒙疆政権とのつながりが大きかったと考えられる。この雑誌は、論説、教育文化、歴史、地理、文学、雑感、児童読物という項目分けがされ、各号によって若干取り上げられる項目は変動した。雑誌には、投稿者の論説、一般教養や学問知識の紹介、モンゴル人民共和国を含むモンゴル関連情報の紹介、文学作品、翻訳文などが掲載されていた。

『新モンゴル』は『漢声』と違って、創刊号のあとがきや巻末の同郷会活動報告が日本語で書かれている以外、投稿文にはモンゴル語が使われている。『新モンゴル』誌の中に投稿規定は掲載されていないが、投稿原稿の使用言語はモンゴル語と定められていたのではなかろうか。強い民族意識を抱き、この刊行物を通じてモンゴル文化の発展に寄与すると主張する学生たちが、モンゴル文化の根底を支えるモンゴル語で自己の見解を表明し合うという行為自体が、重要な意義を有していたに違いない。満洲国時代初期の留学生は来日前すでに中国東北部や北京などで高等教育まで受けていた人が少なくなかったが、モンゴル語ではなく漢語での教育が主体であったため、モンゴル語での文章表現には不自由を感じる人も多くいたのであろう。

『新モンゴル』は1944年9月刊行の第4号で停刊する。その後蒙疆政権下では新たに「日本留学経験者の会」が発足し、1945年4月に『Manduqu Mongγul（興隆するモンゴル）』（以下、『興隆するモンゴル』と記す）という機関誌が創刊された。二木博史氏はこの雑誌が『新モンゴル』の後継的な性格を有している指摘している<sup>24)</sup>。帰国後のサイチンガーや、サイチンガーの教え子と考えられる日本で生活した経験のない女学校生徒たちが『新モンゴル』第4号に寄稿していたことからみても、『新モンゴル』が「同郷会」の機関誌という原則は崩れていた。サイチンガーたちが『新モンゴル』の代わりに自分たちが支障

なく寄稿できる雑誌として、『興隆するモンゴル』をつくった可能性が考えられる。

近年、現存するこれら4種類の雑誌（『漢声』創刊号、『新モンゴル』創刊号・3号・4号）が影印本として1冊にまとめられて出版され、研究利用がしやすくなった<sup>25)</sup>。これらの雑誌は他の満洲国・蒙疆政権時代の出版物同様、内モンゴルの档案馆、内モンゴル社会科学院や大学の図書館、新聞社資料室に保管されていたり、個人が私蔵していたりする稀少な資料で、自由な閲覧や複写は難しかった。また仮にこの時期の文章を今日、書籍として再刊したとしても、政治的判断によって文章に改竄が加えられたり、削除されていたりする事例がしばしば見られる<sup>26)</sup>。また、この時期の出版物の中で用いられていたモンゴル語語彙は、現在のように表記規則が確立していなかったために執筆者によって表記に違いが生じていたり、今日では使用されていない語彙や執筆者の造語と思われる語彙が多数含まれている。再収録する際に、編集者がこうした語彙を何の注釈も加えることなしに自身の判断で改変してしまう事例も少なくない。こうしたことから、この時期の資料を読み解くには最初の出版状態のまま目を通すことが不可欠であり、影印版での刊行には大きな意義がある。

### 3. 『新モンゴル』誌第1号

鳥根県立大学メディアセンターが保管する「服部四郎ウラル・アルタイ文庫」（以下、「服部文庫」と記す）には、故服部四郎氏が収集したモンゴル語資料が多数含まれている。服部文庫に収められている20世紀前半期に内モンゴル地域や日本国内で刊行されたモンゴル語出版物の中には、希少価値のあるものが多く存在し、そこにはこれまで存在そのものが知られていなかった資料や現存が確認できず研究者が探し求めていた資料もある。前者の一例は、井上治氏が明らかにしたモンゴル語版の『FRONT』陸軍号であり<sup>27)</sup>、これまでモンゴル語版『FRONT』の海軍号は見つかっていたが<sup>28)</sup>、陸軍号も存在することは知られていなかった。後者の一例は、『新モンゴル』の第1号と第2号である。

第1号はこれまで現存が確認されていたのはただ1冊のみで、その1冊はすでに述べたように終わりの数ページが欠落していた。そのため影印版でも第1号は64ページまでしか掲載されていない。しかし、服部文庫所蔵の第1号は欠落ページのない完全な形で、影印版において欠落していた第65ページ、第66ページ、裏表紙見返し、裏表紙を補うことが可能である。

そこに記されている事項から、以下に述べる新情報を得ることができる。まず、裏表紙見返しに記された奥付からは、創刊号に関する書誌情報が得られた。これまで推測の域を出なかった創刊号の発行日付が1941年（原文では「昭和十六年」）7月5日であったこと、印刷所は第2号、第3号と同じ東京の「文聖舎」であったことが判明した。文聖舎はモンゴル文字活字を作った竹内正の弟である太田国三郎（『新モンゴル』第1号から第3号までの奥付に印刷者としてその名が記されている）が経営していた印刷会社である。竹内

は、陸軍退役軍人である鈴江萬太郎の依頼により鈴江が編纂した『蒙古語大辞典』を出版することになり、モンゴル文字活字の製作から開始して、鈴江の死後に辞典の出版を完成させた。それが機縁となって竹内は満洲国におけるモンゴル語印刷物の出版に関わることとなり、渡満前に自分が作った活字を文聖舎の弟へ預けた<sup>29)</sup>。この活字が『新モンゴル』誌発行に使われたのであった。発行者は、「善隣学寮内 留日蒙古同郷会 学術部」である。また、奥付の上に日本語で記された「感謝の言葉」には、本誌刊行の目的が「日本文化を蒙古へ輸入し以つて蒙古文化の復興に貢献する」ことにあり、この雑誌に「文化輸入研究等を輸送する機関車」としての役割を期待していることが述べられている。これと同様の趣旨は同郷会会長ウルジー（漢語名：施雲卿。東京外国語学校学校教師）、同郷会副会長ハーフンガー（漢語名：滕統文。駐日満洲国大使館書記官。後年、内モンゴル自治区成立後は自治区政府副主席を務める）も発刊の辞の中で述べている。雑誌には留学生らによる日本の文化や学問をモンゴル地域に紹介し、根付かせるための文化運動としての役割が課せられていたということになる。また、蒙疆政権のテムチグドンロブ主席、李守信副主席、満洲国のバドマラブダン興安局総裁、日本人の木村祐次郎らが資金面で援助を行ったことも明記されている。

65ページ目にある同郷会の活動紹介記事には、「我留日蒙古同郷会ガ成紀七二四年成立以来茲二十二年ノ星月ヲ経タ」<sup>30)</sup>と記されている。このことから同郷会の設立が「成紀七二四年」すなわち西暦1929年にまでさかのぼることが分かる。1929年といえば日本に留学していた学生が「蒙古留日学生会」を結成し、機関誌『祖国』を創刊した年であるから、同郷会はこの学生会の延長として活動する団体であったと考えてよい。1941年3月に開かれた役員改選の会合の様相について、「ハフンガ氏ノ新入会員十七名代表トシテ答辞ガアツタ」という記述がある。ハーフンガーはこの直前に来日して東京で生活を始めており、同郷会に加入するとすぐに同郷会副会長に就任した。留学生ではないハーフンガーが入会したということからも、同郷会は留学生を主体としつつも会員を留学生だけに限定する団体ではなく、日本に居住するモンゴル人が入会可能な、いわば「在日モンゴル人会」としての役割をもつ団体に発展していたと考えてよい。会員数は二百数十人でうち日本国内の小中学校、専門学校、大学に在学中の留学生が180人以上いるという記述から、ハーフンガーのような留学生以外の会員が数十人いたことになる。そのほかに、1941年春に大学・専門学校へ進学した42人および卒業帰国者9人の名前、改選された同郷会役員の名前がそれぞれ紹介されている。役員のうち、機関紙の編集に携わった学術部編輯係にはサイチンガー、ホルチンビリグ、ブフウンドゥス、ソドノムユンレンの4人が名を連ねている。ブフウンドゥスは満洲国側のモンゴル人留学生、その他の3人は蒙疆政権側のモンゴル人留学生であった。

1937年に満洲国の機構改革が行われ蒙政部が廃止されると、それまで蒙政部が行っていた満洲国出身モンゴル人留学生の管理は民生部へ移される（これと同時に、モンゴル人以

外の満洲国出身留学生の管理もそれまでの文教部から民生部に移った)。それに伴って満洲国出身のモンゴル人留学生は善隣学寮を出て満洲国留日学生会館へ移り、以後、善隣協会は蒙疆政権側のみのモンゴル人留学生の受け入れを担った。満洲国内のモンゴル人留学生を移動させた理由は、満洲国と蒙疆政権下のモンゴル人留学生が共同生活を送る中で満洲国留学生が蒙疆政権の独立運動に関与し、満洲国における民族協和の具現に悪影響を及ぼしていると日本軍部が警戒したためであった<sup>31)</sup>。しかし、同郷会では双方の留学生が年に数回会合や小旅行を催しており、同郷会は双方の留学生が交流する場としても機能していたと考えられる。

#### 4. 『新モンゴル』誌第2号

次に、『新モンゴル』第2号を取り上げ、考察を加えることとする。第2号は今まで現存が確認されていなかったもので、服部文庫が唯一の所蔵先となる貴重資料である。第2号は全104ページ、奥付の発行日は1942年（原文では「昭和十七年」）6月18日である。創刊号から約1年が経過しての発行であり、『新モンゴル』は創刊号から第4号まで一貫して年1回のペースで刊行する機関誌であったことが分かる。創刊号、第3号と同様に、発行者は「留日蒙古同郷会」、印刷所は「文聖舎」である。誌面の構成も他の号と変わりなく、第2号では論説、教育文化、歴史、地理、文学、雑感と6つの見出しが付けられている。具体的な内容は以下の通りである。番号、括弧内のタイトル日本語訳と人名カタカナ表記は筆者が付した。

##### 〈Sigümjilel（論説）〉

- ① 「Nibpun-dur bičig surur-a iregsen jorilta（日本に勉強すべく来た目的）」、Госintai（ゴシintai）、pp. 1, 2
- ② 「Baysi boluγsan kümüs kiged bičig qar-a üjekü（教師になった人々と読書）」、Sodnamyügrüng（ソドノムユンルン）、pp. 2-8, p. 10（引用者注：p. 9は書籍紹介）

##### 〈Suryal soyul（教育文化）〉

- ③ 「Keüked-ün suryal（児童教育）」、Bökeündüsü（ブフウンドゥス）、pp. 12-22
- ④ 「Mongγul olan-daγan sanaγulqu yariγ üges（モンゴルの人々に想起させる駄弁）」、Rasijongnai（ラシジョンナイ）、pp. 22-23
- ⑤ 「Mongγul-un tusayar jöγsuqui-yin barimta（モンゴル独立の根拠）」、Yosi oka Yinbi（ヨシ・オカ・インビ）（引用者注：原文ママ）、pp. 23-33

##### 〈Sudar šastir（歴史）〉

- ⑥ 「Činggis qaγan-u šastir（チンギス・ハーン伝）」、Qafungγ-a（ハーフンガー）、pp. 34-45

##### 〈Γajarun jüi（地理）〉

- ⑦ 「Γayiqamsiy-tu bayiγal buriyad mongγul-un törügsen orun（驚嘆すべきバイカル、ブリ

ヤート・モンゴルの故郷)」、Dasinim-a (ダシニヤム)、pp. 46-55

〈Jokiyal uqayan (文学)〉

⑧ 「Sin-e жүчүг<sup>32)</sup>, Süsüg-ün čičig (新しい戯曲、信仰の花)」、Qorčibilig (ホルチンビリグ)、pp. 57-85 (引用者注：雑誌折り込みの正誤表で、この戯曲の誤植のみ修正できる)

⑨ 「Tobi ɣajar-un ejid (ゴビ地域の主人たち)」、Tegüsbayar (トゥグスバヤル)、pp. 85-87

⑩ 「Jalaɣu nasu minu (わが青春)」、Sayičungɣ-a (サイチンガー)、pp. 87, 88

⑪ 「Bosču küčülecigeɣ-e (立ち上がり尽力しよう)」、Sayičungɣ-a (サイチンガー)、pp. 89, 90

⑫ 「Biljuqai (雀)」、Sayičungɣ-a orčiɣulbai (サイチンガー翻訳)、北原白秋 (引用者注：人名漢字表記)、pp. 90, 91

⑬ 「Bi yerü (私は通常)」、武者小路実篤 (引用者注：人名漢字表記)、Sayičungɣ-a (サイチンガー)、p. 91

〈Yerü-yin menđel (雑感)〉

⑭ 「Nigedüger quɣučaɣ-a-yin darumal-ača jalaɣaɣu (第1号の続き)」、Idsingnorbu (イドゥシンノロブ)、pp. 92-98

⑮ 「Erdem suruɣ-a-yin bülüg-eče medegdekü učir (学術部からの知らせ)」、pp. 98, 99 (引用者注：この文は目次からは抜けている)

⑯ 「蒙古同郷会記事」(引用者注：タイトル漢字表記)、pp. 100-104

これらの文章について、一つずつ見ていくこととする。

論説の①は、存亡の危機に直面しているモンゴル民族を興隆させるためには日本から優れた点を学び取ることが重要であり、自身の留学目的もそれを達することにあるのだという強い決意表明である。②は、外国同様にモンゴル社会においても書物の重要性は高まるばかりであり、特に教師たちは書物に関心を寄せ読書と書籍の収集に励む必要があるという提言である。また、著者はこの論説の中で、当時満洲国、蒙疆政権で出版され入手可能であったモンゴル語の書籍、雑誌、新聞のタイトル、著者名、価格、発行機関の連絡先などを掲載し、希望者は自ら購読申し込みを行なうよう便宜を図っている。編輯係を務めていたソドノムユンレンは、第3号に「Öbertegen jasaqu mongɣul ulus-un ɣajar-un temdeglel (蒙古自治邦の土地記録)」と題する蒙疆政権領内の地理と気候の紹介、「Delekei inü bömbürčig metü uu (地球は球のようか)」という自然科学知識の紹介、第4号に「《Yirtinčü-yin teüke-yin tobči》-yin dotur-a-ača songɣun abuysan mongɣul-un teüke (『世界史概説』の中から選び出したモンゴル史)」というおそらく翻訳による23ページ分の長文のモンゴル帝国史の紹介、「Boruɣan, egüle, manan, času, möndür, siüderi (雨・雲・霧・雪・雹・露・霜)」という自然科学知識の紹介を寄稿していた。この当時の翻訳文に多く見られることであるが、原典の書名や原著者名が記されていなかったり、中には翻訳であっても翻訳と明記されて

いない場合がある。第4号の自然科学記事も一部のモンゴル語単語の後に「正比例スル」、「速サ」などと日本語が記されていることから日本語からの翻訳文と考えてよい。

③の執筆者ブフウンドゥスは「同郷会」編集係でもあり、また、「モンゴル文学会」の創設メンバーの一人でもあった。モンゴル文学会の主催者ブフヘシグの弟で、北平医科大学で医学を学んだ後に日本に留学している。寄稿の内容は、一国あるいは一民族の興隆は人口の増加と児童教育に拠るところが大きいという視点に立ち、彼が専門的に学んでいたであろう妊娠・出産時の母子保健に関する医学的説明、さらに世界の児童教育思想と児童教育の重要性を主張している。彼は第3号、第4号に、「Yirtinčü-dür delgeregsen yeke qayantu ulus（世界に広がった大帝国）」というモンゴル帝国史に関する、これもおそらく翻訳文を寄稿している。

④は、モンゴルの諺を取り上げながら、その諺と関連した日常の心がけを述べた修身的散文である。⑤は人類学者であり、前年まで善隣協会の月刊機関紙『蒙古』の編輯兼発行人を務めていた吉岡永美（よしおか ながよし）の文章を翻訳したものであるが、訳者と出典は明記されていない。内容は、清朝とモンゴルの関係、モンゴル人民共和国とソ連との関係に言及しつつ、蒙疆政権のモンゴル自治運動を支持する立場を表明したものである。

⑥は同郷会副会長ハーフンガーの翻訳文である。これは日本のモンゴル研究者であり当時外務省調査課の職員であった小林高四郎が出版した『チンギス・ハン伝』（ウラヂミルトフ著、日本公論社、1936年。同書はD.S.Mirskyがロシア語から英訳した“*The life of Chingis-Khan*” Benjamin Blom, 1930を日本語訳した重訳本である）をモンゴル語に翻訳したもので、第1章「十二世紀に於ける蒙古民族」という箇所の翻訳文である。彼が日本語で書かれた学術書に関心を寄せ、モンゴル語翻訳まで行っていた事実は興味深い。当時、モンゴル知識青年層の間には衰退したモンゴル社会の現状を憂い、モンゴルを発展させようという意識が広く浸透していた。そしてそれはチンギス・ハーン帝国時代のモンゴルの栄光を取り戻すという考え方としても現れ、当時の出版物の中では、モンゴルの興隆、復興という表現が多用された。モンゴルの興隆・復興が叫ばれていたこの時期、モンゴル人は自民族の歴史、特にチンギス・ハーンの人物とその時代のモンゴル史に強い関心を寄せており、そうした知識欲を満たすための活字の需要も高まっていた。『新モンゴル』誌上にもモンゴル史関連の記事は毎号必ず掲載されている。このハーフンガーによる翻訳も、読者に自民族の歴史を理解させるとともにそこからモンゴルの現状について再考させようという意図が含まれていたであろうが、第3号以降に続きが連載されることはなかった。

⑦は、バイカル湖とその周辺の風光明媚な自然を描写した散文である。

文学関連の⑧から⑬に関しては後述する。

⑭は、第1号からの続きであり、第2号でも終了せず、第3号に続きが連載されている「人間はどれだけの事をしてきたか」という翻訳文である。原著者名が第1号で「Canitosi」と記されているのみでそれ以外の原典に関する情報は記されていないが、正しくは原著者

は法哲学者で、芥川龍之介の友人でもあった恒藤恭（つねとう きょう）で、原書のタイトルは『人間はどれだけの事をしてきたか』（新潮社、日本小国民文庫、1936年刊）である。同書は人類の歴史、文明の歴史を簡明に紹介した児童書で、『新モンゴル』計3号の中で、第1章「人類の過去と現在と未来」全文と第2章「一番初めの人間」の途中までがモンゴル語に翻訳されていた。イドゥシンノロブは『新モンゴル』の第1号から第4号までのすべての号にわたって文章を執筆していた唯一の人物である。第3号と第4号には「Bügüde nayiramdaqu mongγul arad ulus-un edügeki bayidal（モンゴル人民共和国の現状）」と題する翻訳文も書いている。これは、⑤でも触れた月刊誌『蒙古』の1941年5月号から8月号に連載されたロシア人ベルリン著、播磨植吉・日本語訳の「モンゴル人民共和国の現状」と題する記事をモンゴル語に重訳したものである。モンゴル人民共和国の地理・行政・産業・社会の現況を紹介した内容で、第3号では24ページ、第4号で9ページという長い分量を占めて掲載された。彼自身はもちろんほかの同郷会会員の中にも、モンゴル人民共和国の社会状況に関心を寄せる人が多くいたのであろう。第4号には漢語や日本語をモンゴル語に翻訳する際に留意すべき翻訳技術論をまとめた「Гaдaγadu-yin kele-yi mongγulçilaqu-yin tuqai（外国語のモンゴル語訳について）」、男女間の恋愛という当時まだ珍しいテーマを正面から取り上げ、恋愛とは愛情（精神的愛情）と欲望（肉体的安楽）の充足であると論じた「Inaylal-un ögülel（恋愛論）」を掲載していた。

⑮は、第1号刊行の際に編集者、出版社の不注意により、巻末に掲載するはずであった同郷会役員の写真が巻頭に掲載されたことを詫言た知らせである。

⑯には、1941年夏に行われた夏期合宿訓練の様子、卒業帰国者29人の名前、航空士資格を取得した留学生ボルジグト（ハラチン右旗出身）の紹介、1941年秋に行われた同郷会大会と日帰り旅行の様子が記録されている。また、奥付の上にモンゴル語で書かれたあとがきでは、誌面のモンゴル語活字を組んでいるのはモンゴル語を知らない日本人であり、さらに印刷紙が欠乏し校正刷りもできないために誤植が生じていると説明し、読者の了承を求めている。

## 5. 『新モンゴル』第2号に掲載された文学作品

次に、『新モンゴル』第2号に掲載された文学作品を検討する。

⑧の「信仰の花」は編輯係の一人ホルチンビリグの作品である。彼の寄稿はこの戯曲と第1号巻末の「同郷会」の活動紹介文しかないが、このモンゴルの牧民家庭を舞台とした3幕物の戯曲は文学的価値が高い。満洲国・蒙疆政権期の戯曲作品はもともと少なく、これまでは『Yeke Köke Tuy（大青旗）』第5号（1943）に掲載された、エルデムトゥグスが創作した歴史劇「Qongγur Ĵula ökin-ü çirig-tür dayaysan jüçige（ホンゴルジョルの出征）」<sup>33)</sup>のみが知られていた。その前年に発表された「信仰の花」は同時代のモンゴル社会を舞台として、民衆の生活、特にチベット仏教信仰をテーマとして描いた作品である。

物語は、肺病を患い病床に臥している父ヒシグト、後妻ナブチ、ヒシグトの子である少年マンダフとその妹スチンゲレルを中心に展開する。チベット仏教を信仰するナブチはヒシグトの病気を治療するため、僧侶の祈祷による治療法を続けている。マンダフとスチンゲレルはかつて生母が病気の際にも祈祷による治療を続け、結局、生母の命を救えなかったという苦い経験から、近代医学による治療を父に施したいと願っている。マンダフは医者を招いて診察してもらうようナブチに提案するが聞き入れられず、僧侶を招くというナブチの意思に背くこともできずに苦しんでいる。ナブチもマンダフもヒシグトの病気の治癒を心から望んでいるが、マンダフの考えを理解できないナブチはマンダフの親不孝をとがめるばかりで、両者の間に生じている溝は一向に埋まらない。病気治癒の読経を繰り返す僧侶への布施のため家財を少しずつ売り払い、また、兄妹は学業を放棄してヒシグトの看病を続けるが、結局ヒシグトの病状は悪化し死んでしまう。ヒシグトは亡くなる直前に病床に二人の子供を呼び、自分と父（兄妹の祖父）が「モンゴル人のモンゴル」を建設する活動に尽力してきたことを話して聞かせ、また、今後マンダフたちが積極的に外国の先進的な学問や文化を学び（ただしヒシグトは、それによってモンゴル文化を喪失してもいけないと注意も与えている）、モンゴルを一層興隆させるよう期待の言葉を述べ、息絶える。間もなく、漢人商人の親子が現れる。この商人の父はかつて無一文でモンゴル地域にやって来た時には、ヒシグト家から恩恵を受けたことがあり、モンゴル語やモンゴルの風習もある程度理解する。商人は返済できない借金の肩代わりとしてヒシグト家の家畜を一方的に持ち去ってしまう。ナブチはそれを見て、旧来の慣習を尊重して生きてきた自分の価値観と新時代の状況との間に大きなずれが生じている実情に思い至り、子供たちと共に涙を流すというストーリーである。

満洲国内、蒙疆政権域内を問わず、当時のモンゴル社会が抱えていた大きな問題の一つは、民衆のチベット仏教への盲目的なまでの強い信仰心であった。こうしたモンゴル社会の状況を戯曲の中に盛り込みながら、父の病気治療が読経によって可能と考えるあつい信仰心を持った世代と、学校教育を受け近代医学の機能を強く信じつつも旧世代の考え方に従わざるをえない青年世代を対比して描写している。作者のホルチンビリグはオラウンチャブ盟の出身で、日本では東京医学専門学校（現在の東京医科大学）で医学を専攻していた青年であったから、モンゴル社会における近代医学による病気治療の普及の必要性和そうした意識改革がいかに難しいかという問題に実際に直面していたに違いない。作者自身は作品の中で自分がどちらの立場を支持するかについて直接述べていないし、残された3人の間の価値観の溝を埋める方法も示されていない。しかし、祈祷を続けて借金がかさみ、その返済のために利己的な漢人商人に財産である家畜をほとんど持ち出されてしまうという悲哀に満ちた結末を用意していることや、モンゴル人の主権確立のために若い世代に対し学問を学び、文化の発展に尽力するよう呼びかける人物を配置しているところからも、作者の意図が民衆への啓蒙にあったことは明らかである。こうした時代状況の中で、

作者のホルチンビリグは絶望しているわけではなく、むしろ明るい希望を抱いていたであろう様子は、病床のヒシグトの「お前たちが生まれたこの時代は本当に希望に飾られているんだ」という時代認識や、漢人商人の口を借りた「今日のモンゴル人は自ら政権を握り、学校を建て、新時代の学問知識をますます増やしつつある。今後、我ら漢人はこれまでのようにモンゴル人を利用することは難しくなる」という認識から知ることができる。この戯曲が実際に上演されたかどうかは不明だが、蒙疆政権下の地域では1940年から演劇運動が行なわれており、寺廟の祭りなど人が集まる所で頻繁に演劇が上演されていた<sup>34)</sup>というから、上演用の脚本であった可能性も高い。上演作品の中には、ちょうど「信仰の花」のように民衆のチベット仏教への盲信を批判する意図をもつ作品もあり、それゆえ、「劇を見なかった喇嘛達は『お前達は芝居などをすると死んでも極楽に行けないぞ。豚や畜生になる。』と上演した少年達をおどしつけた」<sup>35)</sup>という。

⑨トゥグスバヤルの散文「ゴビ地帯の主人たち」は、ゴビ地域を支配するモンゴル人たちは、モンゴル再興のためには現在のままでゴビの砂礫のような非協調的な民族性を捨て去り、互いに団結して活動することが重要であるとモンゴル人の内面からの変革の必要性を穏やかに語りかけている。

⑩から⑬を発表したサイチンガーは『新モンゴル』編集係の一人で、機関誌発行に大きな役割を果たしていたであろう人物である。蒙疆政権からの派遣留学生として23歳で訪日した彼は1937年4月から1年間日本語を学び、1938年4月から1941年12月まで東洋大学専門部倫理教育科で教育学を学んだ。日本留学中に詩歌の創作、散文や評論の執筆、翻訳活動を幅広くかつ積極的に行っていた。帰国後は女学校の教師やテムチグドンロブ主席の秘書などを務め、日本の敗戦と蒙疆政権の瓦解後、1945年秋から2年間モンゴル人民共和国へも留学した（帰国後、Na.サインチョグトと改名）。内モンゴル自治区の成立後はモンゴル族を代表する作家として文筆活動に専念するが、文化大革命期には日本、モンゴル人民共和国への留学経験などから迫害をこうむり、1973年に病気のため死去した。彼はこの第2号が出版された時、すでに帰国していたはずであった。第2号以外にも、モンゴル史に関する学術書の翻訳（原著は矢野仁一『近代蒙古史研究』、弘文堂書房、1925の第2章）を第1号に「Dotuγadu mongγul kiged manju čing ulus-un sudar degereki qolbuγdal（内モンゴルと清朝との歴史的関係）」というタイトルで、第4号に「Edügeki mongγul-un teüken-ü niγtalal（近代蒙古史研究）」というタイトルで連載した。また、第1号には児童読み物として「Tuukuū jangjun（東郷将軍）」という東郷平八郎を紹介した散文を寄稿している<sup>36)</sup>。

⑩の詩「わが青春」は、

「深き谷底から湧き出ずる／清泉の澄んだ流れのごときわが青春よ。／この世のあらゆる泥濘の中を／巨大な力をもっていかに貫流するか。／（中略）／装飾のためとなった花瓶の花は／世話を続けねば枯れてしまうが／固く根付いた自然の草は／先端を失っても不屈に起き上がり伸びるではないか」（拙訳）

という四行四連の頭韻を踏んだ定型詩である。ほとぼしる清流や草木の生命力を通じて、清澄でひたむきな情熱を表現している。

⑪の詩「立ち上がり尽力しよう」は、

「強固な勇気、勇猛な精神が／衰退したモンゴルを堅固にし得る。／先生生徒、子供たちが／果敢に立ち上がり尽力しよう。(中略)／熱き心、愛情が／全モンゴルを守り得る。／同胞たち、朋友たちが／共に立ち上がり尽力しよう」(拙訳)

というこれも四行四連の定型詩で、民族復興への情熱を呼びかけている。どちらの詩も『新モンゴル』第2号刊行の前年、1941年末に東京で油版印刷された彼の処女詩集で内モンゴル最初の現代詩集でもある『*Sedkil-in Qani* (心の友)』(以下『心の友』と記す)に収録されている<sup>37)</sup>。この詩集に収録された計32編の詩には、彼が生まれ育った故郷の自然や留学先である日本の情景、民族復興への熱い情熱、信頼すべき仲間との友情が青年期にふさわしい一途で純粋な感情によって描かれている。その後のモンゴル人民共和国留学時代や内モンゴル自治区成立後に創作された作品よりも芸術的完成度の高い作品が多く収められていて、彼の代表的詩集となっている。

⑫と⑬は翻訳文で、北原白秋と武者小路実篤の散文の短い翻訳文である。日本留学中のサイチンガーがどのような欧米や日本の文学作品を読んでいたのかという問題について、実証した資料はない。これまで判明した彼が日本語から翻訳した文章を見ても、モンゴル史、児童向け科学知識、世界著名人の名言、プロパガンダ誌に限られ、文学に直接結びつく翻訳は確認されていなかった。今回見つけた翻訳文は、日本の著名な詩人、作家の作品の翻訳であり、彼が目にしてきた外国文学作品を初めて具体的に特定することができた資料となる。

前者の翻訳は、詩人・作詞家として知られる北原白秋(生没年:1885-1942)が雀を観察しながらつづった長編散文詩『雀の生活』(新潮社、1920年刊)の第4章「雀の形態と本質」の一節で、これを逐語訳で丁寧にモンゴル語に置き換えている。モンゴル語に翻訳した箇所の日本語原文は、「雀は風に怖ぢません。怖ぢるところか風に向つて飛び込むのです。それがどんな強い風であらうと、一旦は風に向つて飛び込みます。吹き飛ばされようと、くると筋斗(もんどり)打たうと、決して躊躇しません。一気に向つて突進します。すぶらしい勢ひのいゝ雀」<sup>38)</sup>である。詩集『心の友』を見ると、彼は、風にそよぐ小さな草葉、人間を圧倒するようにそびえる岩崖や山や建築物、整然と並んだ樹木、立ち込める霧といった表現を好み、繰り返し用いている。彼はこうした情景に心動かされる詩的感性を有していた。また同時に、上の「わが青春」、「立ち上がり尽力しよう」にみられるようなたくましく前へ突き進む力強さ、特に自然の中に見られる力強い生命力をいつくしみ詩題としていた。『心の友』の代表作の一つで彼自身も好んで朗読した詩「*Jamba-dur darudaysan nilq-a noyuy-a* (ジャンバーに押さえ付けられた若草)」は地面に捨てられた古びたジャンバー(柳の枝を細かく編んで作った柵)を突き抜けて生える若草を題材にした

もので、次のような表現がある。「(略) 大地の心臓から新たな生命を得て／上へと伸びる果敢な私に／場所を譲ろうとしないのならば／突き抜けて生えるだけだ。／(中略)／すべて古きものは破壊され／新たな命あるものが開花することを知っているか／激しい力で突き破り／新たな光にまみえるのを見るがいい」(拙訳<sup>39)</sup>)。彼が北原白秋の詩文を翻訳した動機も、小さな体の雀が風を恐れずまっすぐに立ち向かって行くその力強さに感銘を受けたからであつたらう。

後者の翻訳は、武者小路実篤（生没年：1885-1976）の散文で、日本語に翻訳すると次のようになる。「私は誰の名前を聞いても、まったく恐れ驚くことはない。私はそれを恐れ、自分の本当の考えを偽る必要はない。私は私より良き考えを持つ人を尊敬する。私はまた、私と異なる考えを持つ人に出会えば、自分の考えを再考してみる。いかにそうとは言っても、自分の考えていないことを考えているかの如き顔を表したり、或いは、自分の考えていることを考えていないかの如き様子を表すことは、まったく必要ない。自分の考えはいつでも自分の考えである。私は自分の考えを他人の考えによって完全に良くしようと願うけれども、一向に偽ろうとは考えない」(拙訳<sup>40)</sup>)。自我を尊重し人間肯定を主張する白樺派の武者小路実篤らしい文章で、武者小路実篤の著作の中にこれと似た文章はあるが、ちょうどこれに対応する文章を見つけることはできなかった。サイチンガーに限らず当時発表された文章の中で、自己研鑽や大衆啓蒙、社会変革の目的に文学という芸術形式を活用しようとする姿勢はよく見られる特徴の一つである。

『新モンゴル』には、翻訳文学として第4号にナムユムドルジが翻訳した「Kiristü-yin šabi」というドイツのR.M.リルケの短編小説が掲載された。これは内モンゴル地域におけるキリスト教文学作品の初めての紹介であった。1940年前後は欧米、日本の文学作品の翻訳が相次いで現れ、内モンゴル翻訳文学史の中で重要な時期と筆者は考えている。代表的な翻訳作品を挙げると、『新モンゴル』掲載ではないが、1939年にはリンチンホルローが『Miyui-yin Tursiyçi (猫の探偵)』(上下2巻、モンゴル文学会、1939)という内モンゴルで最初となる探偵小説を翻訳した(原作は米国文学であるMary E. Wilkins Freeman, *The long arm, The Long Arm And Other Detective Stories*, 1895。ただし、劉半農『猫探』上海中華書局、1917からの重訳<sup>41)</sup>)。また、フールンガーは日本の火野葦平の中編小説『*Buudai Kiged Čirig* (麦と兵隊)』(蒙古会館、1939年)を、『新モンゴル』に寄稿していたブフウンドゥスは中編小説「*Irbis-ün simnu* (豹の妖怪)」(原作者・原典不詳だがドイツ文学か、『*Ulayan Bars* (丙寅)』)に連載、1939)を、エルデムバートルは短編小説「*Toluyai-yin subud-un jëgüdel* (真珠の首飾り)」(フランスのモーパッサン「首飾り」の翻訳<sup>42)</sup>)、『*Mongyul Udq-a Soyul-un Darumal* (蒙古文化)』2-1に一部、1939)を翻訳していた。サイチンガー、ナムユムドルジ、ブフウンドゥスは日本への留学生、フールンガーとエルデムバートルは日本でモンゴル語教師を務めた経歴を有する<sup>43)</sup>。今回新たに見つかったサイチンガーの翻訳作品も含め、当時の翻訳作品において日本文学からの翻訳が占める割合は

大きく、『新モンゴル』誌が目指したような日本文化のモンゴルへの移入の努力は翻訳文学だけに限ってみてもはっきり見て取ることができる。そして、こうした文化活動は、単に日本文化の移入ではなく欧米文化の移入をも目指すモンゴル社会の近代化への動きの一環として捉えることができるのである。

## 6. おわりに

日本で生活するモンゴル人留学生らによって組織されていた「留日蒙古同郷会」が刊行していた『新モンゴル』誌は、第2号の現存が確認され、これで創刊号から第4号まですべてそろったこととなった。日本へ留学していた青年たちが中心となり、自分でテーマを選び、執筆、編集していた『新モンゴル』は、当時の留学生たちの価値観、モンゴル社会に対する認識、日本との関係などを具体的に記した貴重な資料となる。日本に留学していたモンゴル留学生は日本からモンゴルへの文化の伝達という社会的役割を強く意識し、『新モンゴル』を通じてそれを積極的に実践し、モンゴル社会の向上に寄与しようと働きかけていた。今回は『新モンゴル』第2号の特に文学作品に焦点を当てて、その内容を論じた。今後は『新モンゴル』すべての号、さらには『祖国』、『漠声』も含め、内容を詳細に検討していく必要がある。

## 注

- 1) [Nayusayinküü ほか1989 : 9]
- 2) 1936年5月に「蒙古軍政府」、1937年10月に「蒙古聯盟自治政府」となり、1939年9月には2つの自治政府（察南自治政府、晋北自治政府）と統合して、「蒙古聯合自治政府」が成立する。また、1941年8月には「蒙古自治邦」と名称を変更している。「蒙疆政權」とはこれら政府の総称である。チンギスハーン直系子孫である王侯テムチグドンロブ王（徳王）が主席を務めていたことから、「徳王政權」と呼ばれる場合もある。首府は現在の河北省・張家口に置かれた。
- 3) 満洲国におけるモンゴル語定期刊行物の変遷とその社会的背景をまとめた研究として、[広川2007]がある。
- 4) [内蒙古自治区图书馆1987]
- 5) [フフバートル1997]
- 6) [二木2001]、[Христофер 2002]、[Čoyiraljab 2004] など
- 7) [Šuγar-a 1990]、[Tegüsbyar 1996] など
- 8) [Ba.Gereltü ほか1996]、[二木1998] など
- 9) [Šuγar-a 2002] など
- 10) [Gereltü 1998]、[Gereltü 2003] など
- 11) [Sambuu ほか1987]
- 12) [Sayinčoytu 1999]
- 13) [Rinčinqorlu 1991]

- 14) [莫日根2001]
- 15) [Ücida ほか2006]
- 16) [Erdemtü ほか1993]、[Süke 2003] など
- 17) [笹目1991：56、198]
- 18) [笹目 1991：198]
- 19) [内蒙古自治区图书馆 1987：13, 14]
- 20) [春日 1993：48]
- 21) [石塚 1932：89]。石塚は、『祖国』誌のモンゴル語タイトルを〈Ijajurtan Ulus〉と記しているが [内蒙古自治区图书馆 1987：13] は〈Eke Orun〉と表記している。
- 22) [内田2002：9]。
- 23) 西部モンゴル地域を中国からの独立を目指すテムチグドンロブ主席は、蒙古聯合自治政府の成立後、「チンギスハーン紀元」(漢字略称「成紀」) という独自の元号を採用した。この年号はテムジンがハーンの位につきチンギスハーンを名乗った1206年を元年として数えたものであった。
- 24) [二木 2001：35]。この『興隆するモンゴル』は第2号まで存在する) ただし2号は製本されていない状態である) [Христофер 2002：293]。
- 25) [呼和浩特市民族事務委員会2003]
- 26) [Sayinčoytu 1999] に見られる改竄および削除については、拙稿 [内田2004 a] で言及している。
- 27) [井上 2005]。モンゴル語版『FRONT』海軍号と陸軍号に訳者名は記されていないが、サイチンガーが1953年に執筆した自身の活動経歴書の中で、日本留学中の1941年6月に服部氏と知り合い、モンゴル語版『FRONT』海軍号の翻訳に協力したと述べている [Sayinčoytu 1953：11, 12]。サイチンガーは陸軍号については何も言及していないが、井上氏が指摘したように、陸軍号のモンゴル語翻訳作業が海軍号と同時期かあるいは海軍号より早かったとすると、陸軍号の翻訳にもサイチンガーが関わっていた可能性は高い [井上2005：27]。
- 28) モンゴル語版『FRONT』海軍号の存在とそのモンゴル語訳が服部四郎氏とサイチンガーによる共同作業であったことは、バイカル氏が初めて明らかにしている [バイカル 1996：139]。
- 29) [竹内 1972：88-93]
- 30) [『新モンゴル』第1号：65]
- 31) 防衛庁防衛研究所所蔵の [陸軍省大日記類、陸満機密・密・普大日記、昭和11年第7号、「満州国国内留日蒙古人学生の指導の件」、p. 2]) アジア歴史資料センターでオンライン公開。レファレンスコード：C 01003144700)。
- 32) 原文のモンゴル語で、今日のモンゴル語正書法と一致しない表記については、本稿では下に一重線を引いて示した。
- 33) この作品については [二木1998] を参照。
- 34) [菊池1981]
- 35) [菊池1981：211]
- 36) この散文は [Sambuu ほか1987] にも [Sayinčoytu 1999] にも収録されなかった。
- 37) 『心の友』は、翌1942年にも蒙疆政権下の主席府出版社で活字出版されている。服部文庫には、東京で印刷された1941年版『心の友』が所蔵されている。本の表紙に「謹呈 服部先生へ」と

いう日本語とサイチンガーの署名がモンゴル語で記されていることから、サイチンガーが服部氏に直接寄贈した本と考えられる。服部文庫にはまた、1941年11月に主席府出版社から発行された日記体散文書籍『*Elesü Mangqan-u Eke Nutuy* 沙漠の故郷』も保管されている。

38) [木俣修ほか1985:385]。モンゴル語の原文は次の通り。

「*Biļjuqai Nibpun-u silügčün* 北原白秋 *jokiyabai*

*Biļjuqai bolbasu salkin-ača ayun uquriqu ügei bolai. Salkin-ača ayun uquriqu ügei ču bayituyai, qarin salkin ögede esergüčijü bayaturlan niskü bolai. Yambar jerge-yin sürtei doysin salkin bolbaču, kerkibečü nigen uday-a joriγ yarγan esergüčün nisekü inü lab bolai. Tere salkin-iyar üliyedgen ergigdebečü, basa tegün-dür γuyadaγdan tongγurčuyłabaču yerü qoyisilan uquriqu ügei-ber qaγča joriγ-i baribačılan uruysi bayaturlan niskü bolai. (改行) Ene kü biļjuqai kemegeči bičiqan sibayu inü, ali kiri sür bayaturliγ sibayu bayinam.」*

39) [Sambuu ほか1987:50,51]。なお、サイチンガーは、蒙疆政権域内にいたある日本人官吏からこの詩が何を意味しているのかとたずねられ、モンゴルでよく見られるものを表現したまでだと答えたことがあったという [Ünenči ほか2003:263,264]。その日本人は、ジャンパーが日本を暗示しているのではと疑ったのだった。

40) モンゴル語の原文は次の通り。

「*Bi yerü Nibpun-u jokiyałči* 武者小路実篤 *jokiyabai*

*Bi ken-ü ner-e-yi sonusbaču, oγtu ayun sočiqu ügei bolai. Bi tegün-eče ayuju öberün ünén bodul-iyán qaγurmay bolγaqu kereg ügei bolai. Bi bolbasu nada-ača ilegüü sayin bodul-tai kümün-i kündülemüi. Bi basa nada-luγ-a öber-e bodul-tai kümün lüge tokiyałdubasa, öberün bodul-iyán dakin ergičigülün boduju üjümüi. Kedüi teyin kemebečü, öberün boduju ügei kereg-i boduju bayiqu metü čarai yarγaqu ba, esekül-e, öberün boduju bayiy-a kereg-iyen boduju bayiqu ügei metü bayidal yarγaqu anu, oγtu kereg ügei bolai. Öberün bodul bolbasu kejiγ-e ču bolba öberün bodul bolai. Bi bolbasu öberün bodul-iyán busu kümün-ü bodul-iyar tegüs sayin bolγay-a kemen küsekü bolbaču, yerü qaγuramay bolγay-a kemen boduqu ügei bolai.*

41) 同書の原典の特定に関しては拙稿 [Üčida 2005] 参照。

42) [二木2001:30]

43) フールンガー、エルデムバートルの経歴、著作については拙稿 [内田2004b:46-52] 参照。

## 参考文献

〈日本語〉

石塚 忠 1932 『蒙古を新しく観る』、三省堂

井上 治 2005 「『FRONT』モンゴル語版をめぐる」『平成14年度～平成16年度日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究(B)(2)「戦時下、対東アジア戦略と広告宣伝」研究成果報告書』、pp. 11-34

内田 孝 2002 「内モンゴルの詩人サイチンガの日本留学期における著作」『日本モンゴル学会紀要』第32号、pp. 1-12

2004 a 「サイチンガ『心の光』各版の比較研究」『日本モンゴル学会紀要』第34号、pp. 43-56

- 2004 b 「大阪外国語大学におけるモンゴル人教師（1922-1950）」、『内陸アジア史研究』第19号、pp. 43-64
- 春日行雄 1993 『日本とモンゴルの100年』、アジア博物館・モンゴル館
- 菊池杜夫 1981 「蒙古の文化運動（殊に演劇）」、『善隣協会史』、pp. 210-212、善隣会・編、勁草出版
- 木俣 修ほか 編纂 1985 『白秋全集』第15巻、岩波書店
- 笹目秀和 1991 『モンゴル神仙邂逅記』、徳間書店
- 竹内 正 1972 「蒙古活字と私」、『日本とモンゴル』11・12月号、pp. 88-98
- バイカル 1996 「サイチンガの人と作品（上）」、『東洋大学大学院紀要文学研究科〈哲学・仏教学・中国哲学〉』第33号、pp. 134-152
- 広川佐保 2007 「満洲国のモンゴル語定期刊行物の系譜とその発展」、『環日本海研究年報』第14号、pp. 104-126
- 二木博史 1998 「満州国時代のモンゴル人文学者エルテムトゥグスの新発見の作品」、『日本モンゴル学会紀要』第29号、pp. 1-21
- 2001 「蒙疆政権時代のモンゴル語定期刊行物について」、『日本モンゴル学会紀要』第31号、pp. 17-43
- フフバートル 1997 「資料編 中国領内発行古いモンゴル語定期刊行物（1905～1950）カタログ」、『漢語の影響下におけるモンゴル語近代語彙の形成』一橋大学博士論文

<モンゴル語>

- Erdemtü, Buyantoytaqu nayirayulun jokiyaba 1993 *Bökekesig Kiged Tegün-ü Mongyul Udq-a-yin Suryal-un Qural, Öbür mongyul-un soyul-un keblel-ün qoriy-a*
- Ünenči, Gendüng, Galdun, Sodusečen, Š.Döngsig, To.Sodusečen nayirayulba 2003 *Čerengdorji-yin cedenjab, Minu Sayinčoγtu, Möngke Durasuydaqu Na. Sayinčoγtu (Degedü), Öbür mongyul-un arad-un keblel-ün qoriy-a*
- Üčida Takasi 2005 *Rinčinqorlu-yin orčiγuluγsan <Miγui-yin Tursiyçi> kiged tegün-ü uy jokiyal, Öbür Mongyul-un Yeke Suryayuli Erdem Sinjilegen-ü Sedgöl, 2005-3, pp. 50-55*
- Üčida Takasi, Čilaγu, Gündengnorbu čuyγayulun emkidgebe 2006 *Fülüngy-a-yin Jokiyaal-un Čiyulyan (degedü, douradu), Čilaγu čoqulaba, Öbür mongyul-un arad-un keblel-ün qoriy-a*
- Nayusayinküü, Narinγulküü 1989 *Temgetü-yin Namtar, Öbür mongyul-un sinjilekü uqayan teknig mergejil-ün keblel-ün qoriy-a*
- Ba.Gereltü 1998 *Suγa-yin Noγuy-a, Öbür mongyul-un arad-un keblel-ün qoriy-a*  
2003 *Mongyul Jokiyaal-un Onul Ögüleküi-yin Öb Šügülte, Öbür mongyul-un yeke surγayuli-yin keblel-ün qoriy-a*
- Ba.Gereltü, Erkimbayar 1996 *Erdemtegüs tegün-ü uyangγ-a-yin ba küürnil-ün jokiyal, Öbür Mongyul-un Yeke Suryayuli Erdem Sinjilegen-ü Sedgöl, 1996-1, pp. 1-18*
- Na. Sayinčoγtu 1953 *Öber-ün Namtar*  
1999 *Na.Sayinčoγtu-yin Bürin Jokiyaal (8boti), Öbür mongyul-un arad-un keblel-ün qoriy-a*
- S.Sambuu, Kümün emkitgen nayirayulba 1987 *Sayičungγ-a, Öbür mongyul-un arad-un keblel-ün*

- qoriy-a
- Ba.Süke 1991 *Rinčinqorlu-yin Jökiyal Bütügel-üd*, Öbür mongγul-un arad-un keblel-ün qoriy-a  
2003 *Bökekesig Kiged* ≪ *Ulayan Bars* ≫ *Sedgül-ün Sudulul*, Öbür mongγul-un soyul-un keblel-ün qoriy-a
- Ü.Šuyar-a 1990 Dalai-ača subud šügügsen temdeglel, *Önir Čečeg*, 1990-1, pp. 49-55, 64  
2002 Orčin üy-e-yin abiyastu jökiyalči čoyjilang, *Mongγul Kele Jökiyal Sudulul*, Öbür mongγul-un surγan kümüjil-ün keblel-ün qoriy-a
- Tegüsbayar 1996 «Gobi mangq-a-yin čečeg» kiged tegün-ü jökiyaγči erdembaγatur-un tuqai, *Öbür Mongγul-un Yeke Surγayuli Erdem Sinjilegen-ü Sedgül*, 1996-1, pp. 19-22
- Čoyiraljab 2004 Sin-e-ber oldaysan ≪Udq-a soyul-un tusqai darumal≫ dörbedüger quyučaγ-a, *Öbür Mongγul-un Yeke Surγayuli Erdem Sinjilegen-ü Sedgül*, 2004-1, pp. 109-111
- Христофер ЭТВҮД 2002 Өвөр монголын зохиолч Сайчунгаагийн зарим хэвлэгдээгүй зохиолууд, *Mongolica*, Vol. 12 (33), pp. 293-303

〈漢語〉

- 呼和浩特市民族事务委员会 2003 呼和浩特市民族事务委员会编编辑『民族古籍与蒙古文化』总第3-4期
- 克·莫日根 2001 『克兴额——一个科尔沁蒙古人』内蒙古教育出版社
- 内蒙古自治区图书馆 1987 内蒙古自治区图书馆編『建国前内蒙古地方报刊考录』

キーワード 満州国 蒙疆政権 日本留学 新モンゴル モンゴル文学

(UCHIDA Takashi)